

レイチェル・カーソンフォーラム

「原発事故のあと、生きものたちに何が起こったか」

2017年6月3日 13:30~16:30

於 日比谷図書文化館 地下ホール

第一部 永幡嘉之さん（写真家 科学ジャーナリスト）

講演『原発事故のあと、生きものたちに何が起こったか』

「今日の話は、きわめて出口のない話です」というお断りから話は始まりました。確かに、事故から6年たっても全く見通しが立っていない状況なのですから。特に永幡さんが強調されたのは、震災以降という言い方があるが、津波と原発事故は全く違う、前者は自然災害だが、原発事故は人災なのだ、震災という言い回しで防ぎようがなかったと思われるのはおかしい、ということでした。

まず、一面セイタカアワダチソウで黄色く染まった写真が写し出されました。田んぼだったところに人の手が入らなくなるとどうなるか、まざまざと感じさせられます。セイタカアワダチソウの種は毎年飛んできていたのですが、春に人間が水を張って代掻きをするので、発芽しなかったのです。水が無くなった場合、色々な田んぼの雑草が生えるはずですが、セイタカアワダチソウは他の植物の発芽を妨害する物質を出すので、一面に広がってしまいました。草原になったことで、キジが増え、ネズミが増え、それを狙うノスリも増えました。人がいないので、イノシシは昼間から闊歩するようになりました。イノシシは、駆除を始めからは夜しか活動しなくなったのですが。

永幡さんは生態系の専門家として、事故後の放射線の影響があるのではないかといろいろ聞かれたそうです。でも上記の状況は、事故後の福島だけでなく過疎の村では多かれ少なかれ起こりうることで、特に放射線による影響だというものは見つけられなかったそうです。それだけ放射線による変化というのは見えにくいのでしょうか、ただ永幡さんは、影響はきっとある、と思っておられるそうです。その影響を知るには今後も長期的に観察していくことが必要です。

はっきりと影響が出たものに、琉球大学の研究者が事故の2か月後から現地調査したヤマトシジミの研究があります。1年目はたくさん奇形が出て死亡率も高かったのですが、数年後には奇形も少なくなり、今では普通に飛んでいるそうです。ただし、耐性を持った個体が多くなれば、外見上は変化が見えないのです。もし琉球大のメンバーがもっと後に現地に入っていたら、何も異常はなかったという結論になっていたかもしれません。放射性物質を野外に出してしまった人間には、それが自然にどういう影響を与えるかきちんと調べて、それを繰り返さない仕組みを作り上げていく責務があります。

事故のあと現地に住む方、事故収束に当たる方などそれぞれの立場で、こうあるべきという答えが一つではないというお話がありました。シイタケの例では、シイタケを伝統的な原木栽培で行っている農家さんはごく少数で、ほとんどは温室でのポット栽培になっていま

す。悔しいことに原発事故のあと、環境にやさしい原木栽培の農家さんが廃業に追い込まれました。福島から遠く離れた長崎でさえ、何軒も廃業したそうです。温室栽培の方は大丈夫でした。この例でも、原木栽培を支えたいが、そうすると「子どもに汚染椎茸を食べさせるのか」という声もあがる、では産地表示をとると東北の農家さんはますます追い込まれるという、ジレンマを感じました。

そして今、セイタカアワダチソウはソーラーパネルに取って代われ、その電力はやはり東京に送られているそうです。地方からの収奪はまだ続いているのです。そのことを考えずにただ批判をするだけでは、現地の方を苦しめるだけだということをしっかり認識しなくてはならないと思いました。

第二部 大石恵子さん（ふくしまっ子リフレッシュ・in 大磯 西湘の会）

報告『福島の子どもたちとともに』

会では2012年から毎年、大磯に福島の親子を招いて、思いっきり遊んでもらうという保養活動に取り組んでいるそうです。特に子どもたちの健康を気づかい、近隣の医療機関の協力を得て滞在中にエコー検査などを行い、結果の説明もゆっくり行うということを目玉にしています。

子どもたちが楽しそうに過ごす様子を映像で拝見しました。

新しい家への引っ越し予定日の前日に震災が起こり、事故の影響で逃げなくてはならなかったけれど、何とか家族で力を合わせて新しい地で過ごしているという励まされる話もありましたが、家庭が崩壊して母子家庭になった例では、住宅手当が打ち切られた場合どのように暮らしていけばよいのか、そして会ではそのような方をどのように支えていけるのか・・・という話もありました。

上遠さんからまとめとして「私たちは今生きている人間への影響について考えるけれども、まだ生まれてこない未来の世代への影響はさらにはかりしれません。未来の世代の人たちは今私たちが下す結論に対して何一つ意見を言うことができないのですから、私たちの責任は重大です」というカーソンの言葉が述べられ、閉会となりました。

（文責：小川真理子）